

平成20年1月の解説（府県天気予報）

【1月の天候状況】

上旬は冬型の気圧配置が多く、日本海側では雪や雨の日が、太平洋側では晴れの日が続きました。中旬から下旬にかけては本州南岸を低気圧がしばしば通過したため、西日本では曇りや雨または雪の日が多くなりました。一方、東日本、北日本では冬型の気圧配置の日が多く、日本海側では雪や雨の日が、太平洋側では晴れの日が多くなりました。

月を通しての日照時間は、北日本の太平洋側、東日本・西日本の日本海側で平年並、その他の地方では平年より少なくなりました。降水量は北日本と東日本で平年より少なく、西日本では平年より多く、沖縄・奄美では平年並でした。月平均気温は、北日本で平年より低く、東日本は平年並、西日本は平年より高くなりました。

【1月の検証結果】

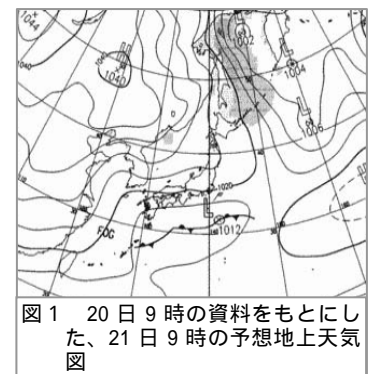
17時発表の天気予報で「降水の有無」の全国平均の適中率は明日予報が83%、明後日予報が80%で、ともに例年^(注)より1ポイント高くなりました。地方毎の適中率では、明日予報は東海、中国、四国、九州北部地方で例年より5から8ポイント高くなりました。明後日予報は例年に比べて関東甲信地方で5ポイント、北陸地方で7ポイント低く、四国地方で9ポイント高くなりました。明日の最高気温の予報誤差は、北海道、東北、関東甲信、北陸地方で例年より0.4から0.5小さく、全国平均は例年より0.2小さい1.3でした。また、最低気温の予報誤差は、大部分の地方で例年より0.1から0.4小さく、全国平均は例年より0.2小さい1.4でした。

^(注) 例年値は気象庁HP（予報精度検証）内「月毎の精度の例年値」を参照してください。

【1月の天気予報から】

20日夕方に発表した明日の天気予報では、21日の東京地方の天気を「曇り 昼過ぎまで時々 雪」と予報しました。

これは『低気圧が21日の午前中に本州の南海上を東へ進む（図1）ため、関東地方では南ほど雨や雪が降り易い。東京地方は地域的に雨や雪が降るか否かの境界付近に位置し判断



が難しいが、降るとすれば雨ではなく雪の可能性が大きい。また、雪の場合には少量でも社会的な影響が生じることを考慮すれば、「雪あり」の予報を発表するのが適当である。』と考えたためです。

実際には、低気圧が予想通りに本州の南海上を東へ進み(図2)、低気圧や前線の周辺部に雨雲や雪雲が発生しました。この雨雲・雪雲は関東地方の上空にもかかりましたが(図3)、地上で雨や雪を観測した地域は神奈川県や千葉県の一部に限られ、東京地方では雪も雨も降りませんでした(図4)。これは関東地方の上空1 km付近で予想以上に乾いた北よりの風が吹いたため、その上空から落ちてきた雪が蒸発したためと考えられます。

『関東地方では、南ほど雨や雪が降り易い』、という判断は誤っていなかったのですが、『東京地方では大雪までは至らずとも、多少の降雪はある』という判断は結果的には誤りでした。

雨や雪は上空で雪として成長した後に地上に落下します。落下途中の気温が高いと融けて雨になり、湿度や風の条件によっては蒸発して小さくなったり、時には全て蒸発することもあります。今回の事例は、東京地方の予報官を悩ませる『予報難易度の高い』パターンでした。

【3月の天気予報の利用にあたって】

3月になると日本付近で冬型の気圧配置が何日も続くことは少なくなり、高気圧と低気圧が交互に通過して、晴れの期間と雨や曇りの期間が交互に現れる天気が多くなりますが、時には一時的に強い冬型の気圧配置になり西日本でも大雪が降ることがあります。ぽかぽか陽気の暖かい日になったかと思うと次の日には一転して急速に気温が下がり大雪が降るなど、天気や気温が大きく変わることがあります。最新の防災気象情報や天気予報を活用して雪や低温による災害の防止や健康管理等に役立てて下さい。

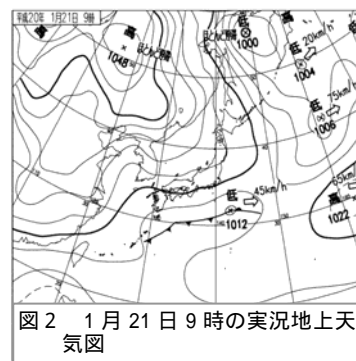


図2 1月21日9時の実況地上天気図

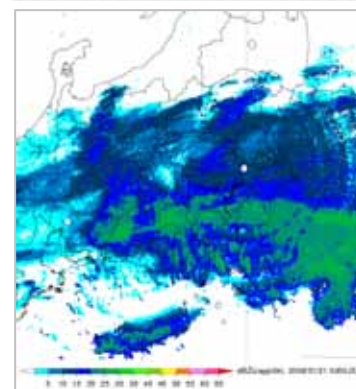


図3 高度4kmのレーダー-エコー(21日3時):上空4kmでは関東地方はほぼ全域が雨雲・雪雲に覆われている。

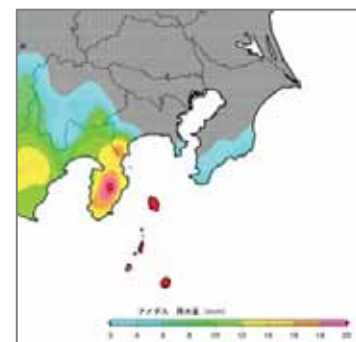


図4 アメダス降水量分布図(21日午前0時~24時):東京地方では降水(雪や雨)はなかった。